



9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

雨催花 雨中花 雨後花 夕花 夜花
燒首花 閑夜花 深夜花 曙花 朝花
花不逢日 花不忘歸 野花 山櫻 遠山櫻
深山櫻 山花 山花盛 滿山花 滿山花
花深山氣色 遠山花 深山花 望山花 望山花
霞陽山花 莫山花 分入山諸 山路花 亂山花
山花東落 嶺花 遠嶺花 連峯花 繁花
仙花 古溪花 旅宿覓夢 韶蕪旅花 繁宿花
行路花 闕路花 名所花 志賀花園 志賀山城
水三花 水邊花 花歌浮水 花歌寫水 花滿澗水
湖邊花 海邊花 河上花 池上花 庭花

閑居花	隣花	望花	田家花	山家花
都花	繁庭花	望花	古京花	故鄉花
社頭花	花所	杜陵花	杜陵花	古宅花
花交松	竹間花	松間花	柳邊花	花陽松
依花待人	依花待客	依花待友	依花客來	家花勝他花
花苗客	山花苗人	行人留花	尋花會友	花時客來
花友	花作春友	花宴	花前興	櫻狩
花忘老	老後花	老見花	對花耽老	尚齒會
花使	花賞	花慰老	花忘愁	花便
花下	花宿	花宿	花木	花本
花根	花枝	玉梢	花色	
花与脣勾	花露	花重香		
花鏡	花澗	花筵		
花紋	花淵	花錦		
心花	花浪	花錦		
花手向	花面歎	花顏		
花易散	花摘	花顏		
花半落	花欲移	花見		
年之惜花	無風散空	形見花		
雨中惜花	對月惜花	花將散		
纏見落花	老人惜花	花麻		
落花多	落花	花漸稀		
落花堆	落花處々	貴賤惜花		
落花滿山	落花堆	對客惜花		
落花多	落花處々	惜花切		
落花多	落花堆	惜落花		
落花多	落花處々	惜落花		
落花多	落花堆	深山落花		

苔上落花 山蹊落花 落花滿山路 行路落花 開路落花
宿所落花 水上落花 落水浮冰 河上落花 滯落花
湖上落花 海邊落花 禁庭落花 古宮落花 故鄉落花
鷺宅落花 庭落花 落花滿庭 夜庭落花 闌庭落花
見花不補庭山居落花 因家落花 山寺落花 社頭落花
曉落花 朝落花 莖落花 夜思落花 梦中落花
內前落花 風前落花 落花隨風 日後落花 雨中落花
雨後落花 落花似雪 花不殘 花落枝綠 見落花
落花散衣 花落頭 落花滿室 花落客稀 找花
思殘花 尋殘花 花僅殘 遠尋秋花 残花風芳
霞藏殘花 閨內花 寄花離別 花前別人 寄花懷

杜翁迷懷 寄花迷懷 花可幽思 花催懷舊
寄花懷舊 寄花神祇 寄花釋教 花翁老常
見花觀花 花祝 寄花祝 花有舊色 花佳色
花色舊久 花契萬年 花契返年 花契多春
年之花珍 遂年花勝 花思來年 花思來年
心在花 肆情寄花 肆情在花 花時心不靜 入道與花
花駭定心 花下延思 花不言志 對花思西 花如舊
依花忘家 花有遲速 花未忘 雜花
野遊至暮 肅白 肃白 肃興 老後春興
春眺望 海上春望 湖上春望 水鄉春望 春日望山
山中春望 旅中春望 二月
一月宴 曲水宴

桃花

牡丹

堇

雨中堇

野堇

故鄉堇

荒砌堇

吉宅堇

摘堇

蛙

澤蛙

川蛙

夜蛙

田蛙

水邊蛙

夕蛙

雨中苗代

寄苗代迷懷

井蛙

浦躑躅

水邊躑躅

山躑躅

巖上躑躅

岡躑躅

夕見躑躅

山振山吹同

思山吹

山吹咸

翫山吹

折山吹

岸山吹

鳥山振

里山吹

幽居山振

水底山吹

山中山振

名所山振

雨中山吹

暮春山振

惜山吹

山吹散

蔓子花カキツバタ

藤花

紫藤

雨中藤花

月前藤花

幽栖藤

隱家藤紀

禁庭藤花

池邊藤花

水上藤花

水邊藤花

藤花映水

橋上藤花

瀟下藤花

岸藤花

浦藤

山藤

森藤

松上藤

藤懸松

藤花悬松

紫藤藏松

藤爲松花

藤爲松衣

翫藤花

藤花留客

藤花宴

折藤

暮春

暮春待人

暮春藤花

藤花散

暮春雨

暮春風

暮春霞

暮春月

暮春鳥

暮春鶯鶯

暮春郭公

海邊暮春

名所暮春

幽居暮春

惜暮春

暮春迷懷

暮春幽思

惜春

年々惜春

依花惜春

寄花惜春

老人惜春

兼惜春

惜春不駐

惜春非一

惜春逐年

殘春

殘春日少

春殘二日

歲時春尚少

又登生路晦日

三月盡

三月盡夕

三月盡夜

惜三月盡

三月盡花

江邊三月盡

海路三月盡

行路三月盡

故鄉三月盡

山家三月盡

閏三月盡

三月盡迷懷

春風

山春風

春嵐

春天象

春日

春夢

春夕

春煙

深山春

每山有春

春嶺

春松

春山

春野亡々

春行路

春闌路

春曉

春野

里春

故鄉春

春闌矣

春山居

春山家

春天象

春日

春風

春煙

山家春興

春隣家

春田家

春橋

春川

春淹

春江

春海邊

春磯

春海路

春水路

春池

春浪

春危露

春植物

春木

杜有春色

芦葦

春獸

春鳥

春聲

春色

春香

寄春雜物

春車

春舟

春行

春秋

春旅

春思

春懷舊

春釋教

春神祇

春手向

春祝

春山重尋人

春人事

正序

二月

三月

閏二月



伶歌集卷之二

卷之三

深居記

曇花

朝
子

卷下

花下忘飯

六
春くばくふをとう承く半わがま花代小社のこ
うけをかく園の若えとし桜花ちぢむまつあす。
方足りせば春日はせんべい小庭をし美匂ひまづ花うら
あましゆめ渺びど小うそれへ翁の花す。風を吹きまづ
さくら人いさくらぬ櫻花いとすみ縁を取るをさく
春霞ちれぬふそを花ざきりもどふわくねじは桜を
初生を産すまづくまづ花ちりやもまとあく
古しらえをゐかきらめくはるのゆきを城の骨だ
金石と達はるの小えほへやすとつす桜やうう
移みる家代す。紫うちえよりかると消せぬ者とよ
詞く家代を構とく。多岐に桜の花小野れうう
子と家代を構とく。多岐に桜の花小野れうう
代ちく花代の花り結うて花名をまじて萬葉代山
同うと呼大系の桜花うり小わらを志づくま

仲義謗者
叔子也
之子也
子也
子也
子也
子也
子也
子也

山川記

深山樹

遠山樓

山樓

野花

千
さと見て凡ての花の匂ひも香ふも、
勅にゆきあら樹は少しうきぬれありも、
代數はるあるは春の暖かく樹の花ざらうす
全ちづくわが林わざるふ風すまほけはる
勅花をとめの多の勅故わざく、小御もも
代絶ゆるとて朝の風しの河、ば花はありばと見てうす
同りすくぞ勤わるをふまづかる花はうひのちるわと
後精とくも春小へあく、と獨ちくぞゆり一春一うれい
勅麦をへ勤ひとせう(木)が小ゆ、ば花の多そと
約すく人わづばつまえず人後深まそと
勅古里の荒まく波うけむ続氣せぬ、き花のた
全家にとよま、わちぬく樹やぞゆり、
反核小もし草木、木もも木、木もも木、木もも木、
とくらむとよみぬ花原小玉ひじ、波うけ

正月 入内家之處
紀伊 宮彩
宋宗 入内家移除
野邊た 高麗△
才智丸
後京極
空度
紫室
内大臣

山口花生

代にかは花の種をうふといたせ筆とやうぞワづく
行ひもとあとうる小ちよこの志地のうに種められまつり

俊穂

湯山志

代吉郎の事小かねばせむる時見に筆のうを
代シの若きの山たる筆を花めらかすわざとすれ
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

元序

あ山美生

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

爲業

花添山氣色

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

別業

涼山志

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

望山志

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

涼山花

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

涼山志

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

涼山花

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

今木山修

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

山海志

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

山花東原

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

山原義

代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを
代かうて花の威小かすらうのひとと小うるくを

後京極

遠山峰

連峰

舞石

松花

古漢

旅宿見聞

千葉の代りの園と云ふ所をもつてゐる。まろやかな
秋の香りが秋の花とすこし小扇をうむる寒の枝じよ
はいゆくまことにあれ梅のどのぞうらうちうどくバ
右のこのみのこの梅をうゑて筆はあくぞきに
於ける絵工筆のひろがりわがわがおとすもめぐれども
日花の夏ひうけとくわよ境山ももくらの影をえわせし
秋石上なる壁の梅はうきてはるへられぬるをもす
絵樟うけのひくひくの梅はうけうけの梅をまつり
子のまよやうの花園をうけうけの花のくわいはく
軋交沙しては葉の花園をうけうけの花のくわいはく
代りの花の花園をうけうけの花のくわいはく
代りの花の花園をうけうけの花のくわいはく
枝うちもわざかぢかの花されば落てもかの泡とほれ

義家
吉田
通照
是之別
君子
通異
為氏
宋仲
宋文
視障
欣呢
高世

何
上
花
也
鹿

接
あ、さと様のことをおにのもうすきのねはもえれ
後接
あとの花の色とせめがいふ者のかよ
自
うる里、ばゆふにまとうじゆん紙り白ひのくまくらへ
続
後葉系あひのうまくるなほよ白ひくまぬ紙がみやも
代
ゆうふるむじよつまくまくまくまく
日
えをかどわくわくわくたの花とくべとわわわうれ
日
たのまくまくとくばくばくまくまく
日
うの花とくわくわくわくわくわくわく
日
あくまくとくばくばくまくまくまくまく
接
あす葉やうじ若の様もいすくわくふくちる年

左氏

社頭集

花葉が茂るもづればう壁のゆゑ名前も氣
力ふきよもとくらの桜花も立ち候どかくさぎうち 後成
つるすやかふれ花のすへこも一本が小日付も書ある 部宿へ
ねまふ 月後涼もどうと見もの桜の花あてもほり花は無よけれ 月前
桜有花 月はのどまし白の梅花枝さくを欣松の葉下 尾
此もはのどまし白の梅花枝さくを欣松の葉下 室能
けんと赤桜の緑よびり毛内おくれぬ花またと 月五
月と紅も小枝ごくも白葉も紫あらの梅すらも 月五
月と白と尾との花や枝やくに松いばさきそくの葉 大浦
代むちの花の尾との梅枝またと白葉もこれり梅いは
花陽れ 月の花の枝く見えをばねと花の緑またとれ 俊信
みえれ 代むアセバ桜すらふかすら遠く梅枝またとれ 俊信
付間木 月の花の色もとれひきくと白の花はよお並んで 先瑞
移有木 かわよ坂や梅の花城くと小岩を度じ室の松むじ 本山
柳家 かふえぞれへたゞも青松のさびくと花はめ 月前

家花勝他家
依舊待人

家花勝他家
依舊待今
日
きぐひよきの稀よものかぢらぬかびりとぞこれ
吉
一やゑるるるくと稀花をみゆめりてちうがち
日
稀花ちくびらうじもどそくまことのまくも
日
ひるくわくねわかふるのゆきの枝はわてるるい
日
づるの様のまくとくと稀のむかとすと
日
稀はこもすふうくわくま處花をうきともとよみ
後撰
ヒさんと繁へくの、さくくは花の香ばとくま
日
ひくとふおそくわく花かくかくとくとくとく
後
すくは花かくかくかくかくかくかくかく

日 まゆまほ役うへとひ、あるの花札の情きりえれ
代わらきく花の役ふともれへがまわふもかむは
さきのとるお社そそれ櫻花奉小猪さるすはる
萬代お年
春乃宮月
枝あをむる花は度てゆくちよびづれと妹の事より
散うる花のふよがたにとゆくとぞもじらする 実房
わちる花小鳥説半どひて盛里小鳥の年をもゆする やうく
續君多役者小鳥の福をもく人のうきよ、ますより 賀葉
金 番のえふ木のいよそや朽ううらが花役ね桜うりせば 乙長
代志まくびぐくひくまくやある小木うくはる花うちせば 本助
月 さけうくみへゆうでゆううしづせとせんくも 伊勢
物 お花扇小としのくのあよぞうがくすものいづも 伊助
代 紅ゆう花扇すれとうくまくのいづのどよも 三茶太夫
日 こもり花の役ふともだちがふくらひをひり 大輔
金 まゆまほ哀とくふ櫻花よりやまよもくもす
りす
義友

花作來友

卷之三

卷之三

樣物

卷之三

友則

勅
元さくよんの事方度をきどからりわへかすきりそり 入をあ太政

雅庵

千
人
の
小
さ
な
ま
う
ま
り
の
様
式
は
か
ば
い
た
く
る
も
の

尚書會

老學記

（後）
ともよ、あぢらくも梅もうそて後も若きのむ
梅衣ええむとひをわきとひをひゆひゆてかみ

資治通鑑

香齋先生集

花鳥

第
四

參使
毛主
吳有

木本花
木本花
木根枝
木梢
木包
白花
毛毛毛

古花のまもとからちゆ博、來とばらの酒をまよくまひう
木のいはれととがひきる花の記もく小舟ねざかむ
自大さへ本のいはれとまされ花をめやすいゆもむ
代收れのまくねまひりいはれとまく花の記の記
口本のいはれとまされ花後見ゆがおひ社をまく
金銀小ゆる花の薫の高くば呂のがはくとほまく
後難をはくとてゆく、し萬をうねぬれきくと
月をくわねぬれきくとあゆだとふくふわぞせん
宣平をまくの記の精小びくせちものとひらうもくき
め立あと極りええどし萬花のわらうふくもひやと
代收れの家方をまくる詠ゆくとがく花の記
日をもく花の事ひきくとれ萬をじくにほもひく
日本と小舟くの記はるくじくのまよわんとい
実政

卷之三

卷之八

行道

二

花溪

卷之三

代
着。ゆき齋のことをひく衣の事小ねりも
日
野すなまにいわづる衣すれど、身もと小衣、ども
形
そむち、どももあらゆる墨のあをき衣よも内じゆ
続
ゆる、ふたびる衣すれぐらひす、とふえかるほん
日
花威者即ち、筆小旅のて、着あつて、苦の邊よ
古
年ゆて、衣の境とする所も、あらゆる内を、
日
柄衣も、ゆるぬのを、あはせあらゆる衣を、古
新
茅野のもさへ、もぢと青根、いとも、衣の源
日
る衣の尾との柄、やがて、移あらゆる、けんじらき
日
橋、笠木の下みの、淺衣れど、あく衣の、胸と襟
千
あらゆる衣の、縫へ、まくもゆんと、そもくも
後
橋、又よがうる衣の、うき、はらる、肩も、おも
形
衣の、まく衣へ、ゆく、朱から木の、下の、風の、
千
跡すと、もれ、物の、軽衣が、小衣の、秋の、やれ、
日

能室
りえ
の色園へ
櫻は
右大臣
以也
了也記
引照へ
朱深
呼喚
寛厚
諸々
贊へ
中流右大臣

花摘
老苞
萬頬
花心
心事

卷之三

卷之三

か
お墨小花のひのたまへて、りんごを、さく
さうてのゆき人よほん様なすと、ふわてあそとまえ
後のはうが花の新とて、ひじりがわせれをよみゆく
代はうが花の新とて、ひじりがわせれをよみゆく
もよいひよて様なすとまえのあく、さくひらえ
ちやくもよいひよて様なすとまえのあく、さくひらえ
日もよいひよて様なすとまえのあく、さくひらえ
ばやうかやまくとめいの氣もとて、ひじりが
のづくものかのとて、ひじりが、いじりが
ひのく、あくとわく様なすとまえのあく、さくひらえ
金屋がくわくわく小梅元西歌はまくとまく
金屋がくわくわく小梅元西歌はまくとまく
千歳じくわくえはくわく、さくひらえ立わくとまく
わくわく小もわくえの、さくひらえ立わくとまく
歌わくわく小もわくえの、さくひらえ立わくとまく
歌わくわく小もわくえの、さくひらえ立わくとまく
歌わくわく小もわくえの、さくひらえ立わくとまく
歌わくわく小もわくえの、さくひらえ立わくとまく

讀人ふ知
れせい△
三事の本大庵
後半
須雲△
頭鴉
多喜人多喜
足つる
右角丸
も実
足を一
種清
有友
り能

秋見葉

小麻

花手向

捕致葉

小秋移

萬葉集

花漸稀

千葉

物萬葉や萬葉のまほもひそすうじのまほが極
代すと人をいともきのまほのまほをもねるこれ
古枝花はちくさきとてわざきれど庭うへまほ根をする
後わくとてまほまほのまほにまほのまほにまほ
春うねび咲くとてまほ根衣小きまほ計の花すとまほ
たとて小ちくさきとてわざきれ花のまほにまほ
代すとれのまほのまほにまほにまほにまほにまほ
後わくとてまほのまほにまほにまほにまほにまほ
一年にまほのまほにまほにまほにまほにまほ

津林
經因
後久我政
諸人知
花承
多々之
遍照
圓住
茶武郎
實業
り本
後人不知
芳々
長方

小易散

萬葉集

舊物

後
一束小舟ひさみ花さればもとがへいりまう
内
れをもとへるよまほのば花をかねゆくとす
信
桺シタマツ木をあきへうぐ葉やんじゆそ花沙シハわ
後接
内
く氣わぬまくふくとあどり人やとま
詠
あくればわらうの浦一くようくいばの名桺晴地
色厚
かくまわくとが桺花あうん波ぞすみて音さき
月
春とまよしとおもはくとおはすともすくわ
日
の花いじむと空小消えぬ又んゑいわりと
山純
日
の花も花もくま一意のまくとおもとよめい
付れ
日
の花も花もくま一意のまくとおもとよめい
永紀
日
情じるは花もくま一意のまくとおもとよめい
付れ
日
代風の花とおもて桺花まのば花もくま一意
通後
日
告くよいと見てがよるゆい情じる花のまくとよめい
花もくま一意のまくとよめい
日
若もくま花もくま花もくま花もくま花もくま花
教也

惜花擇遠 挑う詠やといぞゆんと楊わね匂ひとをふすむゆく
貴婦惜春 繰りあまきをひめがくよ、ひまくと花紙ば惜多くわとすらえ
年々擇春 年々て花もとくにいづれも小とまる花へすらど定れ
後撰
新詠のくとさあく、詠を古び花のゆゑをもつする
代よりは小女とら花ひうやじゆくもひとを
代よりは小女とら花ひうやじゆくもひとを
用あとある花ひすれど年々て花もとくに
年々て花もとくにわへ楊花ちかふたてましやう
金美とおとす、楊の花されば詠もひまくきりう
代人志とせわとくとひまくひまく花もあわせられべ
代よりは花もとくとひまくひまく花もあわせ
勤めよりは月もとくとひまくひまく花もあわせ
對聲惜春 寂れよと惜じしきくくすまか花のあはいせ
疊花惜春 有るときうて惜じしきくくすまか花のあはいせ
對室惜春 大脚
後回 あいにくちらそ楊花うるわすの惜もまよ
多事のあすよだるやあむれかくへ花紙ば

卷之三

老情多

卷之三

惜花刀
カニ
日月
月日
月日

自吹風ひよりともがおれのうづくまひにまわらとぞえる 佐
経ま文情ふゆるやうへもとを花のまこととはえし
又もさんもすく花されどもいはく涙のむじうも
月又もさんもすく花されどもいはく涙のむじうも
月またのやいはすととよとくもとしもおれか花のむじ
代大うひおきれやと妙のと後君よたゞ花のあらむし
月とよとよぶねくちあ梅花叶よねくりわくことと
月のくらきよらくだんばわすくもの涙ややく
月とくも移しゆる梅花わよまくふくそくらむぐく
月、風の流す以る梅花风すみやばえ、れひ
月花がよもよわくちるへてゆめぬ方の松がよ
月うふもよもすくも青のひよくくちあ梅花くさり
月とくもよもすくも青のひよくくちあ梅花くさり
後葉 カサマ
西り、
ノ仕 敷家
多き。
永原

代前からくちあひ情じまふ、後も又えんまゆる
日者、とのまきうらば、楊花もみ得ゆく
印まとひよぐ、かとよもじる、けり、花小山いゆ
ばれくちまき花、くま下りわとん、とすをうき
日者、わがふゆる花、むらさきくもへ、後や今
後、次風の満氣れといひ、もとあゆる花のむらに

顯忠
實子內祝王

代前からや陽は情じまへ渡り又へて其處へ
日あとのまゝまゝうかば楊花もの涙のゆくら
日御まといふがめとひそむらんじうの花小山の裡
月ほれくちまゝ花ふるまゝわをそんとすらに候よ
月おぼしわがふ諭る花もひまゝあへ度や今う
後此の諭よわといひすゞもあやの花のむじに延
千少柄ちごふりのくらる花もどくもまゝとまし
日わきく小被みづさばあ花のうりとまゝとあら
日とおもりせぐらうら楊花月のあまともあけは
代もくもくもくえ波都すとあわへるあく度やう
月お花のほりとまゝゆきとが身をうす、とくら
月とよせとひきふくらまくもあ花とふたびよむ
詠詞
秋香の楊されどもあとひひよえ社またさうれ
ワのわうちとまゝ楊花ちみばえととくら
葉を

萬葉集

落花多
落葉堆
落葉重

山海經

深山藏秀

蘇東坡
陽山

續者、よし小又よりや、も楊花くとぞ、さうれどもひやか
金天川をのりて、みづは霞かうらの花をすりとまつせの
楊花をもむまど、うれしわらそちのじとくふみやく
古事記の物語、ごとふうとれ、あうと花より、ぞほる
後事記の物語、ごとふうとれ、あうと花より、ぞほる
後事記の物語、ごとふうとれ、あうと花より、ぞほる
代えねじきの限へりす、げて、清とときくとよ達
われ、ふちる楊枝の花見りて極とね木の花を
古事記の物語、ごとふうとれ、あうと花より、ぞほる
新しよしよしの楊花、せんは天の御衣さびとぞもる
新しよしよしの楊花、せんは天の御衣さびとぞもる
代えねじきの花見りて、おれの夢をかひて、おもむ
まじきふれれて、花の夢をかひて、おもむ
代えねじきの花見りて、おれの夢をかひて、おもむ
代えねじきの花見りて、おれの夢をかひて、おもむ
代えねじきの花見りて、おれの夢をかひて、おもむ
代えねじきの花見りて、おれの夢をかひて、おもむ
代えねじきの花見りて、おれの夢をかひて、おもむ

毛序
書画原
讀余知
日
教雅
後漢
宋玉流說
之宋
雪
易之
覺也
顯抑
孫清

楚辭書

梅花も小風を渡るも風をさうぐいとほのやま
をとゆはえて梅花もいはせの葉のあとれ
草小ちる梅の若のぼれ木又枝花とかすら
梅が木のれよくわらわちのやくわのうと
木のうの葉の緑ひえゆよどか(あらわ)梅の

後法性寺
伊通
完稿
名利

山海經卷第
山海經卷第
山海經卷第
山海經卷第
山海經卷第

讀人言
聖人之教
忠信而後
可謂義焉
日月之光
非私照也
聖人之言
非獨私也
聖人之言
非獨私也

水經注

代ありと小橋をくぐるの川を、と渡のまねと見え
金花さとくらへるが、と春がうるそひに橋渡する岩川の水
内へと小花をあらわす山の井、といふいとがうる山の浪
キ橋を、あらわすが、かへせれどもひのれす、とみえ、さううう
ありあよれどて花のうねるが、と消じゆゆきとぞ
日、安樂のあらわしあるわく、とおのきとぞ
續々と白いまの浪、とむる花をも根づ峰、と消ゆるは
代えと、と小花をあらわす、と橋をくぐるが、と渡
日、川、小橋をくぐるが、と春がうるそひに望月の花とぞ
後花、川、小橋をくぐるが、と春がうるそひに望月の花とぞ
りあせと、とおのきとぞ

卷之二

卷之三

海國圖志

旧毛葛子

萬象萬物
萬象萬物
萬象萬物
萬象萬物

曉南集

勑
勅

夜深人散
客舍中甚寂

金
敷ふ小豆はあほじ精氣もはぐくうるなりと
古
者うつものと、小精るくは實の内か氣をある
代
氣のものもあるもの月歎よあほじ氣の色がまじぬ
月

原之
後冷官院

風雨集

風後集

署之
行通
たとて皇
帝云
勅捕

雨中桃花
南後落雨
蕭云从書

たましれば其の下に少しおまの下どもものひづぎえ
古書あるは渡りて死ちゆくよやくされど
けふ京ちゑもんがまくらとその花をとれ
形容するものもくるきのゆゑをも爲るはれの後
の津とえかるはるのあ花山の底小花ぞおなむを
ちゑの津とえかるはるのあ花山の底小花ぞおなむを
月をうねらぐかの根かくゆる角くさく花のあ
ちゑの津のあ花山の底小花ぞおなむを
後稿の處はとも見る花山とお茶のへんづら茶
金ありのじゆふらう様見えせぬもの多とぞ見え
金身の花とよきとお津島へんづら花とぞ多く
お茶のあえりとお茶の下へんづら花とぞ多く
全くとく前まくべ様見えかふ花のとぞ見え
今もとくとくとえらの多とよきとお津島
御稿もとくとくとえらの多とよきとお津島

萬葉校讎ナリ

自
様小川の水をとまらぬ御
事あきる花がおど
代家君の様へ小舟をねわもあんぐり年とさと
物の後との紙かきくびれ様もひりれ
様とまく君の趣様花ちる紙へおもたど見えじ

高松
元志
後象極
讀人言

萬葉散衣

萬葉娘
花ノ朱宮花猪

行
通鑑
卷之
讀人不知
其後

殘花

思
考
集

卷之八

遠聲殘響

卷之三

閩府志

花あらばとよ人種小草をいきひがのまのども
千代下さる中島の山元橋消ゆうらの宮とぞよる 仲山
事てよえね右里ぐのれを橋あはせりと移西若年
日暮に近所の島田をもと古び花とくまくも後
信実
花あらば花とわよどおじとてみことくわゆる
後惠
経此花、ひとひとひとひとひとひとひとひと
道信
代よす花のゆくめづらき葉繁く、のれ花や沙翁と
東國
花あらば花せすり花が一枚もあらまどり花と
式部
金もすも花とよとひとひとひとひとひとひと
長方
月ちとそもものもとひとひとひとひとひとひと
雅定
肥後
日暮花あらば花の山あらば花の山あらば花の山
以摩
全こなべあらば花の山あらば花の山あらば花の山
高仙、
在那

萬葉列人

寄
江
懷

李易水懷

卷之三

香齋集

叶かづるがよ、いとくらむすめあらわきはせば
刀も萬ちよんそれりもひきのやとひそくさり
春くはなればともあくあれほづるの花みどり
柳れいぢゑみとひもくとひびのまおあく
枝葉の中へもひいとひとひとひとひと
代えよ、おきへきのすまうくれ花ひ春と泣き
の草ひきふねまの春の花、おが春まわと花
根のまもろも育のそれ、おもゆかをうる
後孫のとひもじれはくまくはくとねもくさく
花も緋る草の下で柳も情をもむれあくも
御古へおゆくの情をもむれあくとおもく
物事の多ああ花も葉もうら葉あくまく
柳れいぢゑもあくまく中まことのまことどわ

右大同
仲綱
空
大弱
掌穢
部
多乞
乞補
每
通視
多
改
亦
也
右

寄李愬

軍備懷

第十一回

卷之三

右大同
仲綱
空
大弱
掌穢
部
多乞
乞補
每
通視
多
改
亦
也
右

寄萬神社

卷之三

卷之三

寄毛子也

卷之二

代
いはて極とくのひをばらせのあいぞわき
代へまく氣のまほるく小神のひをえふ
車、ごふ氣か神のほとやうのふとさるもすが
内
おわせにひしのりのゆくわ
月
月もくか氣ふとひどし
キ
車の車へおきれわとひそひぞう氣のらむかたす
古
古だきねせれと氣極氣もんとあるとれど
古
古もとふ氣の車へわるもとわざんとめのと
古
古候もひれもひれのよきの代もひれとひれを
古
古氣はのうとくとくの車へあらととくふとくわ
古
古わび白いはとく極氣後の車へび後まくば
古
古はわくとくはくとくわくとくわくとく
金
金うえちとくの車へとくはくとくわくとく
車、ごふ候とくの極氣後の車へあかじわく

後系稿
白川院
率助
寂蓮
仰光
寂然
曼延
讀余志
魚肺
徒人和
鳥羽院
多喜院
松竹院

卷之三

卷之三

卷之三

七
四
七
九

新編卷之二

萬葉卷之三

卷之三

逐章花勝

孟思東年
再思東年

卷之三

春情寄意
物事はちるに情じふ事へて氣かひの君をもる 後惠
代の楊風の處のちりて氣すむはやう日ぞ見る 出羽舟
月は告記小いやまくじ拂くゆくもあきふら 佐時
後院 楊記まだすれあると何からうが、ぐくの情じどく 神宣
絶記うそひ廢すちあらさん人社せりて思ひと金 実唐
月の申小強て楊のまきをば多ひなほすまき 那由子
とくしがはまくわぬ楊風する我とくもがん 伊豆
後 東の絶あともとづね氣度ひのどもかくへわく 丹波守
物語も告記のまへちらぬまうがのやの趣度あら 丹波守
櫻もくらむれ、れくすくらむそちあらまくさくべ 丹波守
代の風のまくさくよわよせばいのとくおれひ先 実守法皇
内のどううわとうれ氣ひまくわくのやれうまく 丹波守
ちくとくゆきの楊風青ふるむるもくもくと 四位

萬駭安心

卷之三

卷下云志

絶
柳花風あらわね柳風うらやまと見ゆどわくま
月
花柳風うらやまと見ゆどわくま
能宣

四

伊

七

三

卷之三

卷之三

· 4 ·

卷之六

卷之三

雜著

鄂游

李本寧

湖上草堂

水鄉集

卷之三

山中集

勅
鹿々松浦の沖へござりての間まゝの事は
千疊波の波浪もすふえ渡せば鹿々の沖の物事
勅のもの海や鹿のとるほど舟のまゝあるのを記す
代わるまゐのい難もく離れべ鹿がてくも飛くき
月夜に波が下り鹿じまき河内へ秋とすふむひそ
日すすきはる難さだむぬ草の繁ふ角祖村の境
後づく波もくづく銀波のあら葉繁ばかる波
立つる鹿のとくまくゆる梅の繁りむかさ
日よがるの葉ふく波せば鹿がてくとく
千疊波のじごえ波せば鹿せくとく
勅のうちうら波候ゆくじくのと鹿のとく
かくのとくがくくがくも鹿ちくともとたねく
勅吉野の花の聲小木ねんたくまくぬ峰のとくを
勅の松の鹿の樹あれば都のあはれを思ふ

卷之三
國玄
式子內聖
後系極
李子言
通完
秀能
達人忘
全
後二系
寐蓮
聖
式子內聖
家衡

猪内先生
手稿
桃林

代
翁のまゝ伏せてうやをばんとすくの後
傍もとを下りて桃のとくらう花候もあらず爲
月かく今を重うとておうちぬきを分せこれづせと
家持
月ひづきは月のとくらう花候もあらず爲
月盡はるとはえせとたゞくふくらはるはまこと
院憲
すの園紹よりの花下でるた小ちつて先
桃の叶をうりてれ花ぢれべ何くもじひき爲
後桃
あまくらぶあ代毛をもせ桃花とれせうらうもと後ねば
月之千もてうらうわばうどふかとくもと名付
花山院
月の花者かとれがあまくらむわよのうもと
未言
月の花のわいとすまうせばいふ者のとくもとす
出羽舟
かくらう花候もとくふ年が三多きとくもと候
代毛すもれどもうれいわむ三ふ年の候が三多きとくもと
月二年下うるま桃のりゆう花候數也考代のと
克れ

董牡丹

雨中董

加網
莖

水色桂 因桂 井桂 川桂 檉桂 唯

少桂
老桂
名所桂

御嘆へりあらうと云ひ不義の事とてはまう
後我事小まみの氣のひればかく人やわざとすら
代あ葉原さる本付てどもひかるゝは黒木と爲れをも候
月流着せばまづ木からいふはとちよもんをも
月の氣のうきのわのひびとれはそりん被ひ物と
手もひれて拂てゆき茎枝沙汰もすくと
月まほ波音。意園の小舟のたゞ金玉をも重ね計成多
月紫の根とく枝葉のつば茎葉は被ひ物も身も心も
内壁へよもよと鶯は紫のほか茎枝さうとく家水多
代物も花器の形のばく茎はいき行ふが多し
月拂ふ被ぬるうち右左の唐の茎小からぬれと
月蓮生の茎のとくきく浦また小からぬの茎のとく
利石とくらふくはあらるる葉原を拂て茎
方を立入時の事のとくはまくらのとく拂て茎
題國

日
菌の名前は、おまかせをうなづく事
三浦侍

三傳

苗代のち承認せざるに余生を以て年
月
苗代がせきとし人臣根をいわくお門の高さなる
金

山田苗代
有内苗代
夢萬代
李襄

卷之三

衡陽

浦躰得
水字躰得
山躰得
巖上躰得

月苗代かせきとし人世根あるいか小川のあちる
金山のか西の小山のまろふはまのあじせう日光
移動のゆがせくわくねと山かさのいと種類とがき
あられべ小山のまくらかあひや苗代かせうまむ地
金糸小山苗代かせうまむ地の風也も海にまよ
万葉歌のあかるひあ照也かまくらあびわちとくい
月夜の不穏もえて夜々あびの衣は袖かまれな
後孫うどわとぞえをうきう紅やめのまういれど
月夜のうきう紅やめのまういれどの衣は袖か
かみやる、お見の浦のうきう紅やめの衣は袖か
たまうと、うきう紅やめの衣は袖かともう
代はうと、うきう紅やめの衣は袖かともう
月夜やうと、うきう紅やめの衣は袖かともう

松風武部
義孝
信人不疑
実保
下野
又吉

田山次

國語

山振
山吹門

山雪畫

物の花のうち小井よりば黒くさうやくこれ
代の者のかいはんとらひし野の花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

裏葉
後人書

瓶山吹

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

水田山吹

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

阿連山吹

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

水田山吹

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

山吹写水

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

れ鹿山吹

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

吹山吹

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

島山吹

物をも諦てぞよひの花の茎小むするよ
内侍がほのねの花の茎小むするよ

内侍
後人書

里山吹

後撰

伊勢
見ゆるいとほりは里もかへてしのねひの風
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
高柳山吹
山中山吹
名所山吹

伊勢
見ゆるいとほりは里もかへてしのねひの風
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
高柳山吹
山中山吹
名所山吹

伊勢
見ゆるいとほりは里もかへてしのねひの風
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
高柳山吹
山中山吹
名所山吹

金
山吹小たる風ひわづがくばらす年
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
山吹散

金
山吹小たる風ひわづがくばらす年
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
山吹散

燕子舞

金
山吹小たる風ひわづがくばらす年
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
代ももうのえつてまよひよの花の茎小わづ人
山吹散

萬葉

紫雲
有才麻子
月子麻子
幽極氣

行性
要之
读人之
小聖也太政
能宣
孔季
康復至母
飞摩以繫
口任
又子
顯付
空身
為業
始完

讀書有感
禁絕殊
比色殊
水為雨
氣為雲
一
卷之二

日
はよき處のかとひえれど爲めも勿ひりあゆびそざらう
續
びづまのれい、いきくしん難のしまと、かの姫波
花
幕をまの内からみゆきとのふをわせもれる
千
走小波ふれば姫波おにゆきをぞとす家
金
けふじづねとひえ小波の波とくの姫波から
助
立ゆるもむれまとへくもわせくのじの姫波
月
代きはくとみの下げ是とてあく、すまうやねじら
内
いとくもきゆるあく、か岩のじの姫波ねらひの
月
波のうきの様えぬまちが校もたてふくら姫波
月
あく度小波ひづて、さく深てうける峰の姫波
月
姫波の峰する浦の度清みさくねりとある
後
少度の度さくにねえふく車ひて、喰ふ姫波
月
浪うれいふりさくのれえ、べ度ひあくねまの你さ
花
すうで情まくはく姫波度ふうれば浪をどうる
家持
读全書
家持

橋上綠苔
樹下綠草
雨中綠花
風中綠葉

山川
森林
松柏
蘿蔭

後撰
金の處も空くつゝかや、峰の家のかゝる處
まぐれとて東洋のとては小うる森波
朝の向瀬つるぎの森波もれりん浪へうと
がうちれ清瀬川の所あらば底より波ともうる
さきの浦の底より蘆波とよそりん、あらわ
日さまう心ひそめひたの浦小岸の森波と一色、西
続くみねふくさの森波をもどる浪とぞする
代にそよわする森波をもどるのをかどるる
妹づくふくさの森波とちんむしわくと
ね凡のよし浪へおこてきかげくわるとほる森波
月のえのくの森波をのねのせふまひ塔くと
金孫うねふくの森波とひがうとぞ花へ波
金のまのあらふ森波とひがうとぞ花へ波
年とくねね松へれくまうりかくじゆの森波

宋李太史與侍女詩
大故園
顯補
了汝
弟筆
垂白
詩人不知
三索入方
通海
廣綱
繩濟
馬兮
哉矣
宋李

抑

蘇東坡詩

卷之三

孫子兵法

卷之三

後撰
代次へひそかに見る森を松原のむらをす
日暮のもわそうせばちよつと力のまやうで年
金森浪へ君が子年はちよれいをくじくらん
約とがくの森をくほりもうかぐどひとてかく
候そひきあはるの森を匂ひへすばのもの
書ぬといふやう森をひるがふへ育びてさ
め氣ちうそくの森はあらかうのまの森
代きくまふらといはうの峰の森浪とくまん
日暮もすうとうの名をふわぎくらの森をくら
候そひくねる松原がくらの森の木葉の物をくら
木も告おぬる若りのものむらと村あゆづれ
千紀へゆるるうきとふゆるけのとおりをかくら
めを見ゆるむらとこもあらえ家臣のものまへ
物ひきの歎きくらのがまもりものかくと人を

良運
為善
大聖
呼氣
維光
聖以
入定
好惡
世事
之行
身手
家務
益處△
讀此

新
治政のうえに氣がまえまいと峰からくる 機政久政
勅
氣の皆度の度某からてゆるをさづくとたまやめら
代
後承板
事の度りやもその度の度に於はめぐらすすめの度 後承板
物
からてゆるへゆるをれん別ゆる氣の度の度を 痘蓮

けり。まへるにあれば、とてむるの事。 信人今
代、氣ちよとけんじよるのじよどもせどあらむ。 信
後稿 信厚取
付多きひづるゆきが、とくにわだかめする。 実

新治承ひうらとおれふ思ひえまひりきど峰かあらる
代長ひ皆慶の慶ふうほひそくもふうづくとたはせあら
代居りやものえのえのめくはあひゆるすか表の海
かこひきうるへうらとれん別わるおの御のえら
代けするまよ、まよはまよんか表ばくとほゆるまよの
代表ちとくわくとくをさむのひと、喜せどよあひ結此
代付名とひくわくをさむが、ごとくごもぞ初音せつる
代清く小経けくじ郎ふとじもすくし初音せつる
代浦が小候を海のえとれバ海とはちとまきのうち
代りともどもどりのひ津のまの経波の事すくに
代春すく爲あらとひのえのえのえのえのえのえのえ
古達帰をそのおれおれおれおれおれおれおれ
月ぐらの山峰の山峰おれおれおれおれおれおれ
新見りものえとくわくとくわくとくわくとくわく

山家集

萬山

孟子卷之三

卷之三

卷之三

朝忠
名宗
母子之
在九
在九
國情
說記
空龜
仲綱
萬
國基
後之
山悅
重之

二月處夕

三才子集

乙巳年春月
南歸之月考

り説く有矣
故郷有矣
山家ニ有矣
閨房有矣

卷之三

卷之三

躬恆
貫之

全

卷之三

清豐
視政大政

卷之三

卷之三

基氏
諸人之言

100

卷之六

卷之三

卷之三

家譜

マリ

長家

建德山

宋序

代定をめにまわらの山記にてて西行

春水
朝の氣は
大井の前川、江之川
東之
方
いがわひづえの林にあらんともぐえの鳥小湯川
作

卷之三

卷之二

代をもあわせねうるをまぐらの山家にててゐとされ
因、遙かのとせの古事記でさへ大井のふる小姓から又方
男、いがくわひづえの袖にあわせんとしづえのあく小湯川
古流傳系とうりてての多、ばふはゆる身の所
新、りすとくわざらうものとのれのあとのまつぶ
代、もとれどき、れいあてやうの氣を、お知り
代、連れば、まふふとまえど春のねばゆきのすれはれ
方、梅の花、かくくみをひる氣き、思ふ酒からびと
あ、むらうともうじ、ふゆる春の美の内から花ぞちりも
代、ねぬものねうれど、あれわる身の様よほる能
因、あめうけ、ごくの様なほく、えふるまくつ身のよ
新、釣日うげ身の様なほく、消ぬ事とぞ又れ
金、とふくしぬのへも、度きづれ、乃うきこえう
千、花を小もくぬらぬひきえど、まゝのいやを

作矣矣
魚呢△
笑以
內恕也
齋宮女御
作者不知
津々也哉
後京極
長家
有寄
顯袖
乃因△

1

國信

後赤核

寂蓮

卷之三

平經

卷之三

同

卷之三

春下三十七

深山齋
萬山石室
春野
老松
老山龍

卷之三

夷聞錄

社頭集

卷之三

墨毫

卷之三

代えざりと爲ばもとくを家を起ひ居やこへもる
勅わ坂の裏、立木を以て、のうへどやく其の波
月に之のわきの桜の枝、余はれども見えやらず
後援^{後援}花又かと今いふ入ももあひ却どもじうすまふ
古えりをば桜柄とてまきせんわぞもみのあましける
後援^{後援}神まつてあらむ黒川の御ふき良ゆふりす
人ともみのり古里ふりきくとまの志那
石とよきおひきとれば、有きくとめにすま
代えりとよきわきもよしむたに氣のまのとて、あまと
金魚を水槽のまへて、有れば、有りて、有りて
いきづく候あとれまく、今まくともすに若のよぢふ
代えりとよき峰の巖や、湯の井、松の木、山の波
金山の君が、山の波とす。地根のもの役とすは
山里の野の山の木、山の木

永緣

高達

卷之二

讀人言

卷之二

佐性考入卷

山家集

李清志
美因家

春橋

東閣

齊南宮

卷之三

李確

春池

老濟
春不所

卷之三

毛植物

卷一

卷之三

卷之三

卷之三

卷八

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

10

卷之三

卷四

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

代
六事の宋候車牛ふとまつた黒の垣のりす
はるの日ひどく累かぐみあむとくもあやう
古楊是小哀りづくはてててててててててて
株のよしひ衣小梅花又ゆきもつまごのじる
六法深姫のわらわくと薙と薙と薙と薙と薙
吉樹の者と被ふうてとめとめとめとめとめ
後被ふうてとめとめとめとめとめとめとめ
代宇の花わがわがわがわがわがわがわがわ
梅の花わがわがわがわがわがわがわがわがわ
子能くわわるもととくふあわべが部とえ波慶をま
古くわくと薙と薙と薙と薙と薙と薙と薙
代、かくわくわくわくわくわくわくわくわく
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
枕とそまくわくわくわくわくわくわくわく
月能麻川をく流白きもかくと秋の秋の秋の
後能麻川をく流白きもかくと秋の秋の秋の
志高花園山に野をばくと人々の人々の人々

旅寓之局

書本一懷

代
君りや那みの後のみをゆきりと重んじ
後接
其の後也、ごる、ゆ林またひくもどりられ
村
日も、ゆのよろこまねじへ花とてかるものとれ序
月
はばくの後もんをまくまわねくまるとよ月
代
思ふそば、もの故にそむけうきの里小いびをひら
月
春の見え小わるる承うなとかみのちとくもど連ま
古
石ちどりこぼるもひり、とお汝をとくもど連ま
後
えむしづくの内かづれば花よりくせひせど
月
くすもれなうどふ喜びて、我が子がおとむめつま
讀人
月
喜び小いびふとくねおひあきとて、年少れ
古
月
とくねておふる年月少ともふと花ひまくも
月
様れりとすきもくれば、などうきよのちのちの
全
年、とくねのまわいぢどもおとくまくまくうへ
わくに年りて年りて、いまづふおとくわくまく
月

卷之三

東釋教
春神祀
壬午向
壬辰祿

卷之三

二月

三月

閏二月

代より御へて毎一月へおひかきの花のまわらがさうぞおせも
つじりう衣きよしに風氣きよくふ小増ふらうする
月はすこまぐ紀の経れき風きの月をすかあれる
古橋花きよむる年ざと人のいとわねやせ松
後わゆるそそり、ま年だかよかくすとわゆる
立常きりとのどきくさきもあらば先かのわらぎわ
風

美翁

好忠

入佐太政

以直

季之

左大臣

